



熊野遺跡

福岡県八女市大字馬場所在遺跡の調査報告

八女市文化財調査報告書 第26集

1993

八女市教育委員会

序

国道3号線と国道442号線の交わる一帯は最近急速に開発が進み、各種の事務所や店舗などが建設されています。今回の発掘調査も店舗建設が計画されたために事前に調査を行ったものです。

発掘調査にあたりまして、委託者である丸国産業株式会社 代表取締役 近藤宏章氏には終始文化財保護のため御協力をいただき調査を終了する事ができました。紙上を借りて、お礼申し上げます。

なお、本報告が今後の研究の進展になれば幸いです。

平成5年3月31日

八女市教育委員会

教育長 坂 田 不二夫

例 言

1. 本書は八女市教育委員会が丸国産業株式会社（代表取締役 近藤宏章）の委託を受けて実施した福岡県八女市大字馬場字熊野所在、熊野遺跡の発掘概略の報告書である。
2. 発掘調査は八女市教育委員会が主体となり実施した。
3. 遺構の実測は国土調査法第Ⅱ座標系を基準に参加者全員で行い、現場写真は大塚が撮影し、浄書は田島が行った。
4. 本書の執筆は大塚が行い、編集は大塚・赤崎が行った。

本 文 目 次

1. はじめに	1
2. 位置と環境	2
3. 調査の概要	3
4. まとめ	17

1. は じ め に

熊野遺跡の調査の発端は、丸国産業㈱によって、当該地14,771㎡が店舗用地として、開発計画された事による。

平成2年12月25日付で試掘調査の着手がなされ、平成3年2月7日試掘調査を完了した結果、弥生時代を中心とした、大規模な集落の存在が予想された。そのため両者で協議を行い、発掘調査を実施する事となり、発掘届が提出された。

発掘調査は平成3年10月18日に開始し、途中調査区の西側300㎡の追加調査を行ったため、調査面積は約6,000㎡に及び平成4年3月31日に終了した。現地調査に続いて平成4年度は多量の遺物の整理調査を実施した。

調査関係者は次のとおりである。

委託者 八女市大字納楚452-2

丸国産業株式会社 代表取締役 近藤 宏章

平成3年度

八女市教育委員会	教 育 長	坂田不二夫
	教 育 部 長	松延 繁太
	社会教育課長	大月 重信
	同 係長	下川文比古
	同 係員	井上 富雄、平嶋 芳子、井手 勇一、 赤崎 敏男、大塚 恵治（調査担当）
	嘱 託	中川寿賀子

平成4年度

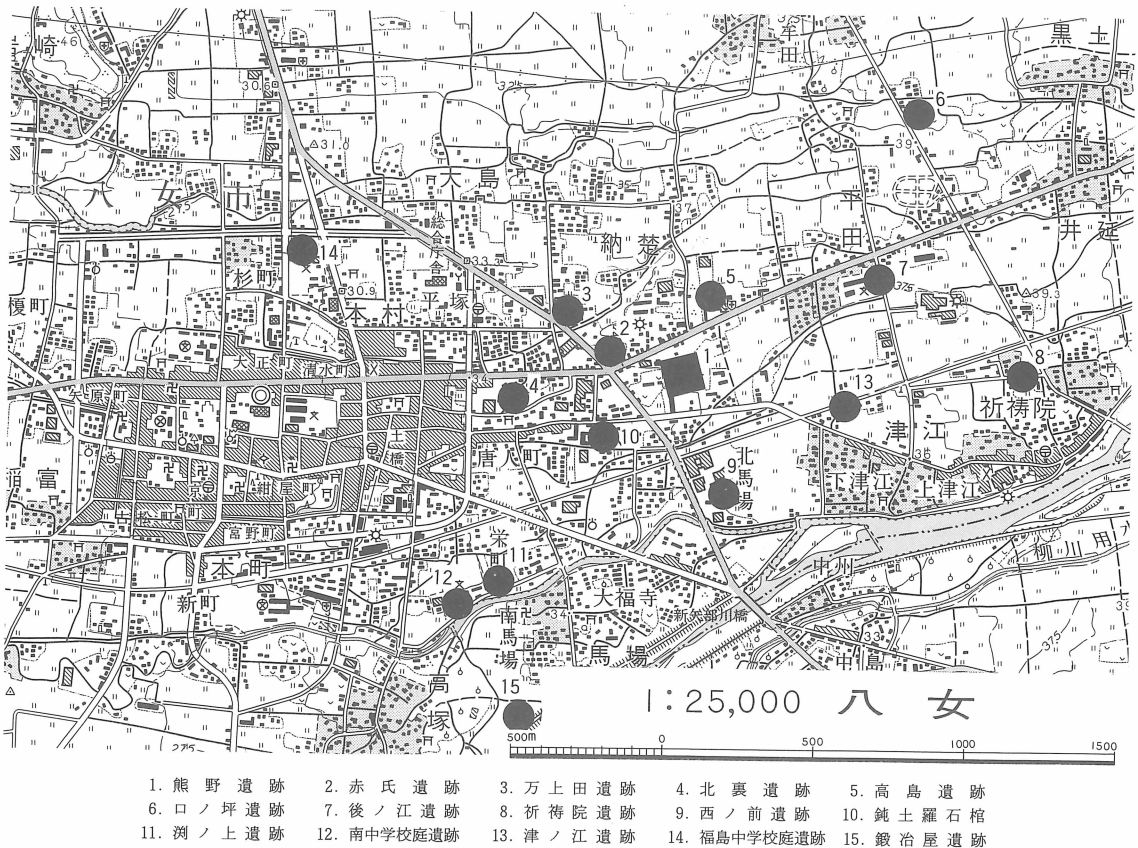
八女市教育委員会	教 育 長	坂田不二夫
	教 育 部 長	松延 繁太（2月まで）
	社会教育課長	山口 龍一
	社会教育課長補佐 兼文化財係長	中村 武紀
	文 化 財 係	赤崎 敏男、大塚 恵治（調査担当）
	嘱 託	中川寿賀子

2. 位置と環境

熊野遺跡は、八女市大字馬場字熊野に所在し、標高約35mの低位段丘上に位置している。

遺跡の西側には国道3号線が縦環し、又、近隣には数多くの店舗が立ち並んでおり、当地は交通の要衝のみならず、八女市における中心的商業地として、今まさに発展の階段を早足で駆け上がっているところである。遺跡の南側700mの所には、八女市内を東西に横切る矢部川が豊かな水量をほこりながら、とうとうと流れており、豊かな水と肥沃な土地を背景に、稲作にはげむ古代人の姿が連想できる。

この地区は過去、^{あかうじ}赤氏遺跡や^{ごえ}後ノ江遺跡、^{つえ}津ノ江遺跡等の弥生時代の遺跡を調査しているものの、本格的な解明は端緒の尾についたばかりと言える。



第1図 熊野遺跡と周辺の主要遺跡 [1/25,000]

3. 調査の概要

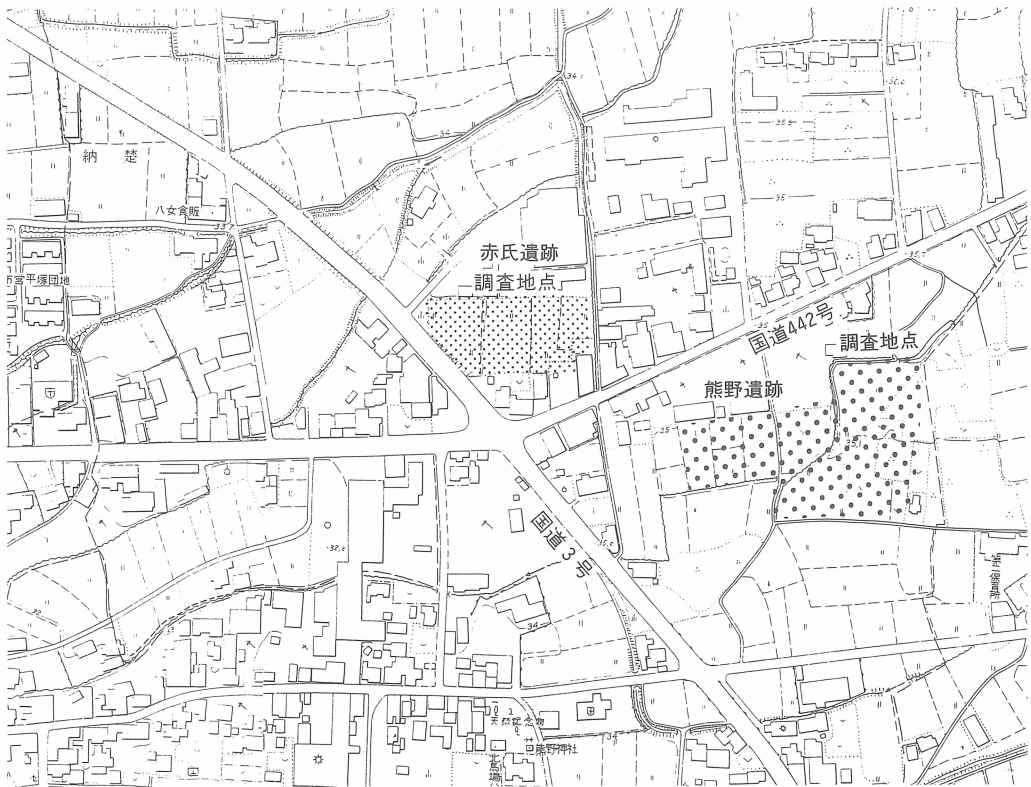
調査の発端は店舗建設に伴う事前調査であり、平成3年2月に行われた試掘調査では、多量の弥生式土器が出土し、住居跡や柱穴、溝（環濠等）などの遺構を検出した。

調査区域は建造物の基礎が入る約6,000㎡が対象地区となり、平成3年10月18日から平成4年3月31日の5ヶ月間で終了した。

この調査によって、弥生時代を中心として、古墳時代～歴史時代の遺構を検出した。主なものとして柱穴、土器廃棄場、貯蔵穴、溝、環濠（一部）、住居跡、木棺墓、甕棺墓、石蓋土坑墓、石棺墓、竪穴式石室等がある。

熊野遺跡は、弥生時代集落の一拠点というよりはむしろ集落の周辺部に位置していた事が、これらの状況より確認出来た。又、環濠と住居群、及び集団墓の墓域の位置関係が把握出来た事により、八女市内における弥生時代の生活形態の一端を垣間見る事が出来たと言う点で、大変意義深いものとなった。

以下、時代別に言及する。



第2図 熊野遺跡調査位置図 [1/5,000]



第3図 発掘前の熊野遺跡



第4図 発掘中の熊野遺跡〔南から〕



第5図 熊野遺跡遺構配置図 [1/400]

1. 弥生時代

遺跡内において検出された遺物、遺構のほとんどが、この時代に集中している。

遺構は柱穴多数、土壇205基、竪穴住居38軒、溝状遺構7条、貯蔵穴5基、環濠1条、土壇墓13基、石敷土壇墓1基、石蓋土壇墓5基、石棺墓20基、木棺墓3基、甕棺墓14基（小児用甕棺7基、成人用甕棺7基）、小児用壺棺墓1基、方形周溝墓1基を検出した。

① 竪穴住居

調査区のほぼ全域にわたって検出した。

総数は38軒であるが、調査以外にのびているものなど判然としないものが多い。

平面プランは整然としたものが少なく、炉の付設も確認出来るものがわずかであるため、恒常的に設営されたものとは考えにくく、この点からも、当遺跡が集落拠点外に位置していた事を強く考えさせられる。

② 自然河川

調査区の北西端部から北東端部にかけて検出した。出土遺物より、当河川は弥生時代中期より古墳時代後期までは、河川としての機能を維持していたものと考えられる。出土遺物の中には多量の祭祀用土器〔丹塗（壺、甕、高杯、器台）〕が混入しており、弥生時代後期前半頃に祭祀行為後、投棄したものと思われる。



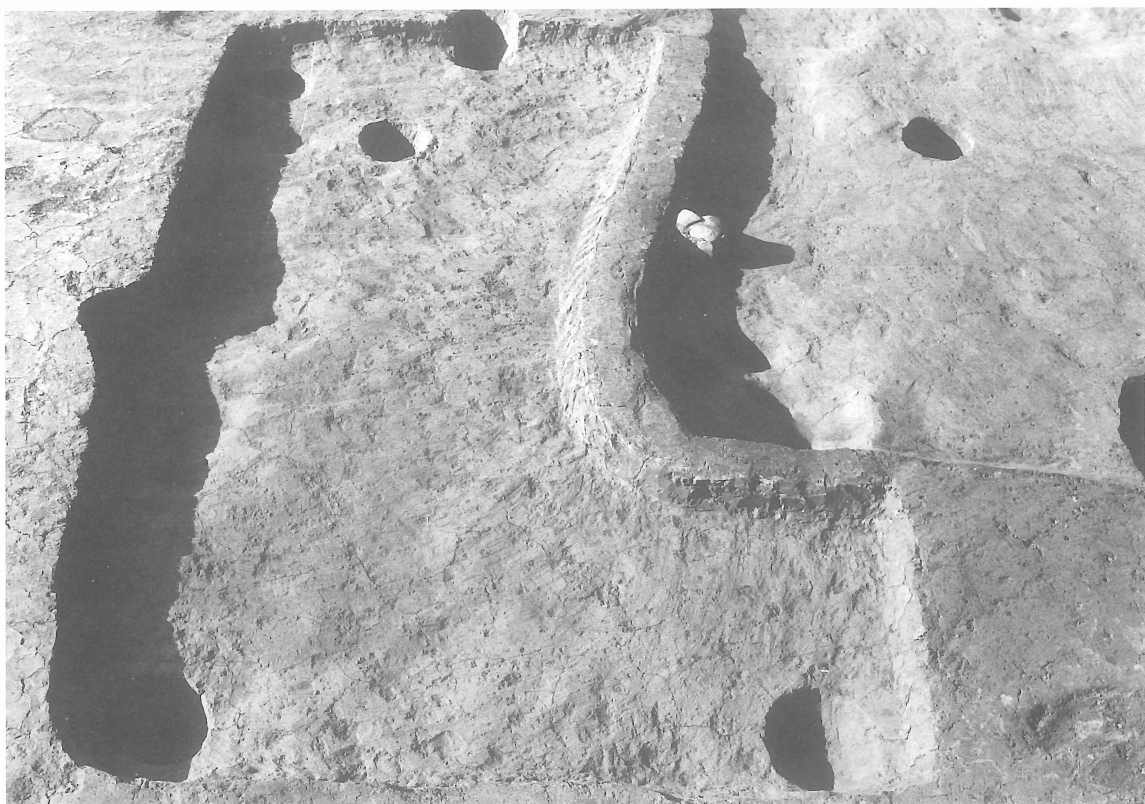
第6図 熊野遺跡全景



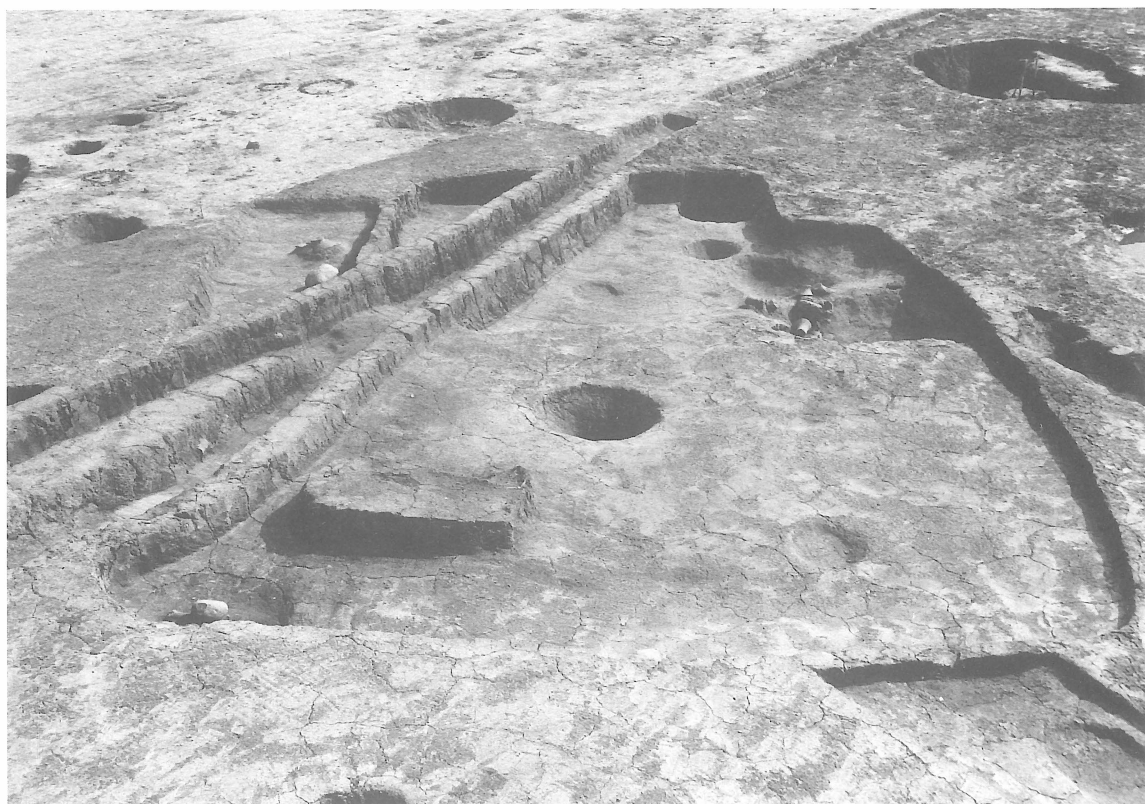
第7図 8号竪穴住居〔南東から〕



第8図 12号竪穴住居〔北西から〕



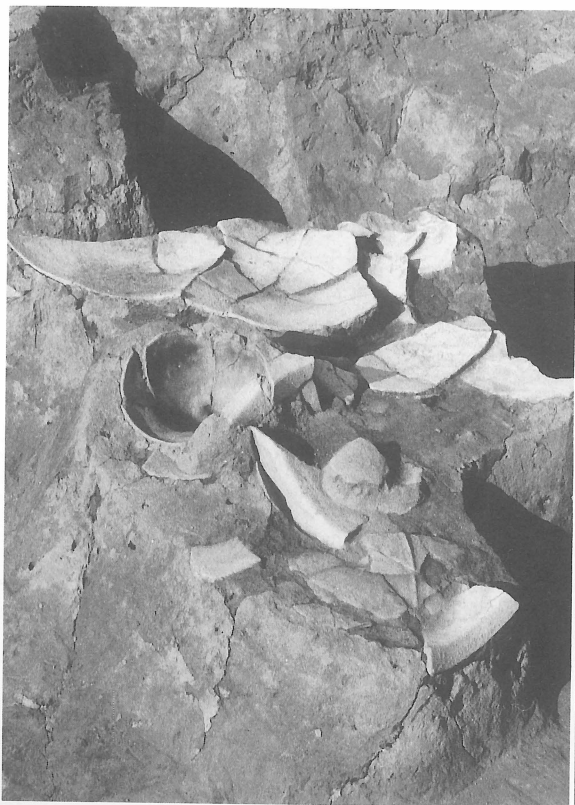
第9図 13号(缶)・14号(缶)竪穴住居〔南東から〕



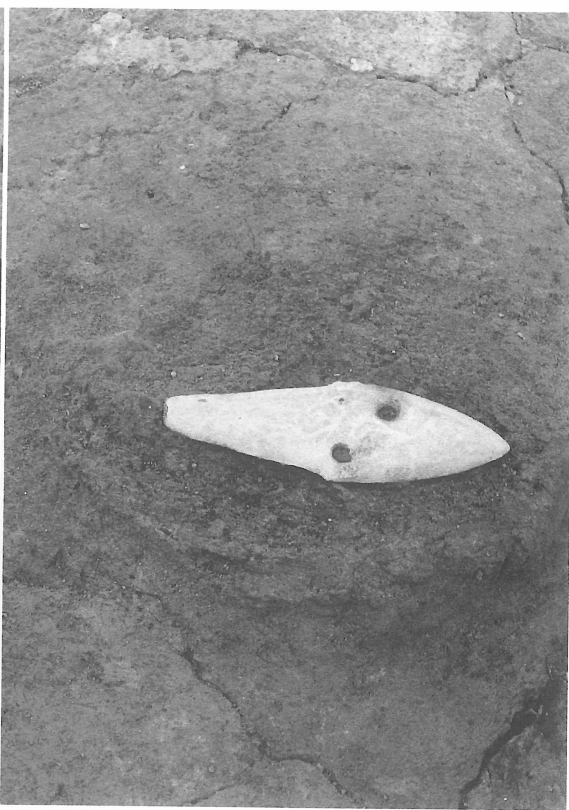
第10図 25号竪穴住居〔北から〕



第11図 38号竪穴住居〔南東から〕



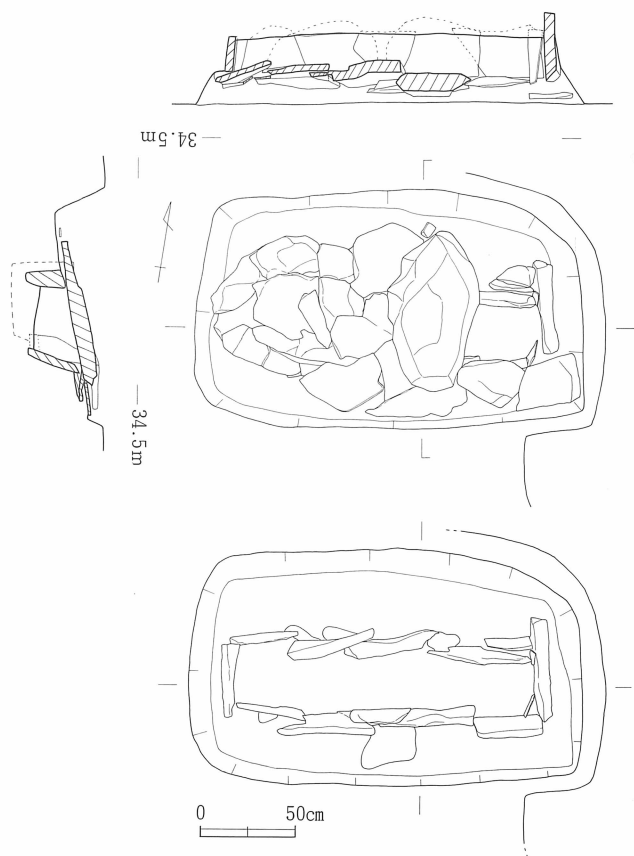
第12図 8号竪穴住居土器出土状態



第13図 38号竪穴住居石剣出土状態



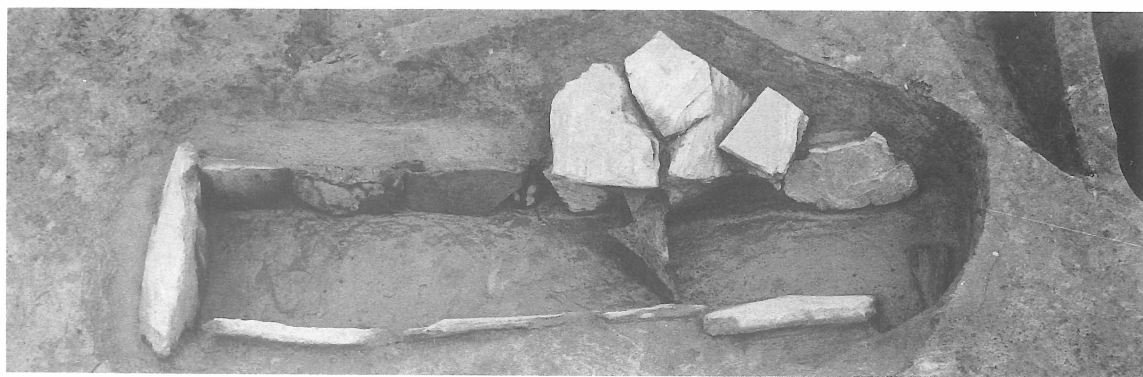
第14图 119号石棺墓



第15图 134号石棺墓 [1/40]



第16图 128号石棺墓



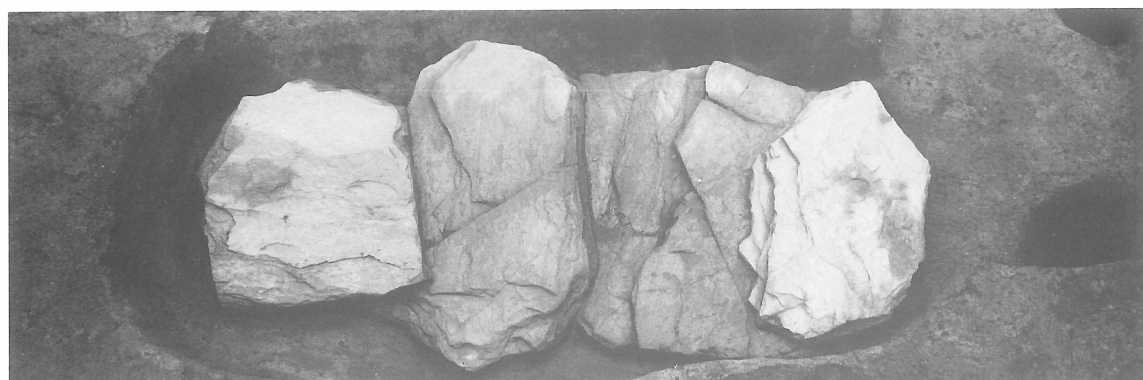
第17图 129号石棺墓



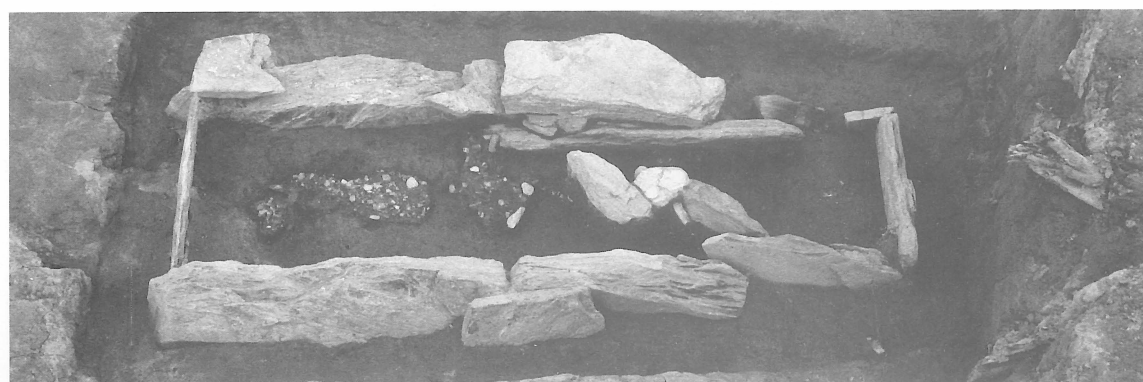
第18図 136号石棺墓



第19図 140号石棺墓



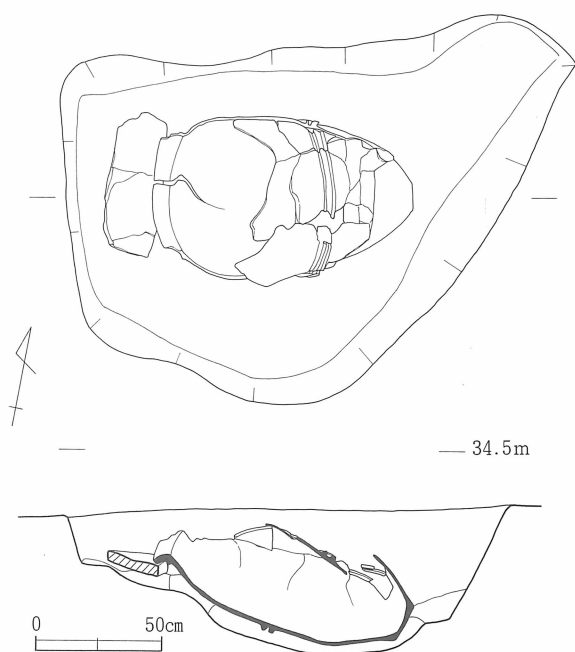
第20図 161号石棺墓



第21図 165号石棺墓



第22図 137号甕棺墓



第23図 214号甕棺墓 [1/30]



第24図 201号(右)・202号(左)甕棺墓



第25图 213号甕棺墓



第26图 209号壺棺墓



第27図 203号(左)・204号(右)土坑墓



第28図 33号木棺墓

③ 石 棺 墓

◎ 134号石棺

調査区の中央部西側で検出した石棺墓である。墓壙部の平面形は隅丸長方形を呈し、長軸2.18m、短軸1.26m、石棺部は長軸1.57m、短軸0.35m、地表面からの高さは0.35mを測る。

主軸方向は $N-81^{\circ}-E$ を示す。

④ 甕 棺 墓

◎ 214号甕棺

調査区の西南部で検出した成人用の甕棺である。

墓壙の平面形は不整形の長方形を呈し、長軸2.2m、短軸1.4mを測る。弥生時代後期後半に属するもので、口縁部直下に縦55cm、横20cm、幅4cmの石材が設置されている。単棺で、木蓋を使用していたものと思われる。主軸方向は $N-78^{\circ}-E$ を示し、埋置角度は地表面に対し、 26° である。

2. 古 墳 時 代

竪穴住居2軒、竪穴式石室（円墳？）1基、溝1条などを検出した。

竪穴住居2軒は、調査区中央部南側と南東端からそれぞれ1軒ずつ検出した。

南東端で検出した15号住居の北壁にはカマドの付設がみられた。袖長0.8m、袖間0.7mのカマドである。



第29図 15号(左)・16号(右)住居跡〔北から〕



第30図 1号古墳全景



第31図 1号古墳石室〔西から〕



第32図 1号古墳遺物出土状態



第33図 旧河川〔西から〕

溝（11号溝）は、調査区南西端から北東端に向かう、検出長約95m、幅約1.0mを測る。

弥生式土器と共に須恵器が溝底部より出土した。6世紀後半頃のものと思われる。

古墳（1号墳）は、調査区中央部東側で検出した。

墳丘や周溝は既に削平されており、現在では主体部のみが残存するだけであった。

主体部は比較的小規模な竪穴式石室で、石室内部北東隅には鉄製大刀1、鉄鏃7が埋葬位置のまま出土した。

3. 歴 史 時 代

溝1条（19号溝）、土壇1基（45号土壇）を検出した。前時代と比較すると、遺構・遺物ともに激減しており、歴史時代においての当地は既に居住区としての役割を終えてしまっている事がわかる。

遺物は土師碗や黒色土器（A式）が出土した。

4. ま と め

調査の結果、熊野遺跡は、弥生時代後期から歴史時代中頃にかけての複合遺跡であり、弥生時代集落がその中核を成している事が判明した。

当遺跡においては、集落の拠点部を見出す事は出来なかったが、環濠外の様子、つまり住居群の最端部と石棺墓・甕棺墓を中心とした墓群の接点を検出出来た事は大変意義深かった。

又、それからの墓域と生活域を区画したと見られる12号溝の検出や、3基にも及ぶ方形周溝（墓）の存在が確認出来たのも、大きな成果であった。しかし、続く古墳時代に入ると、竪穴住居2軒、古墳1基等程しか出現せず、歴史時代には居住区としての使用は見られなくなる。

熊野遺跡は、弥生時代における環濠集落周辺部の様子や、墓域設定時の位置関係が判明しただけでなく、歴史時代までの時間の流れの中で、当地がどのように変遷して行ったのかが明確になったという点で、大変貴重な遺跡であった事が言える。

調査の展開次第では、弥生時代の環濠集落の全体像を把握する事も可能であり、今後の発掘調査に期待がかかる所である。

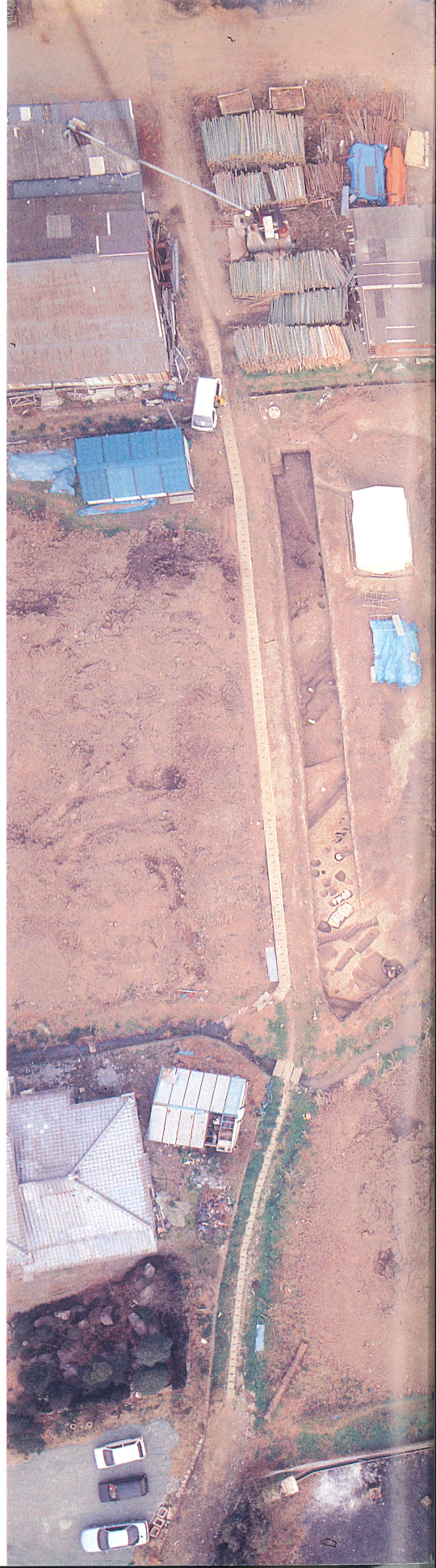
熊 野 遺 跡

八女市文化財調査報告書 第26集

平成5年3月31日

発 行 八 女 市 教 育 委 員 会
八 女 市 大 字 本 町 647

印 刷 ア オ ヤ ギ 株 式 会 社
福岡市中央区渡辺通2丁目9の31
電話 092 (641) 1431



熊野遺跡

(八女市女市文化財調査報告書第26集)

正誤表

頁	行	誤	正
2	3	縦渠	縦貫
2	4	要衝のみならず	要衝のみならず